

令和元年 10 月の解説（週間天気予報）

【10 月の天候状況】

上旬は、高気圧と低気圧が交互に通過し、天気は数日の周期で変化しましたが、東日本と西日本の太平洋側や沖縄・奄美では高気圧に覆われやすく、晴れた日が多くなりました。1 日から 5 日にかけては、台風第 18 号と台風から変わった温帯低気圧が、沖縄・奄美付近から日本海、北日本を通過したことで、広い範囲で大雨、大荒れとなりました。また、北日本、東日本、西日本では、暖かい空気に覆われて気温が上昇し、多くの地点で真夏日を観測するなど、かなりの高温となりました。

中旬は、台風や低気圧、前線、湿った空気の影響を受けやすく、東日本と西日本の太平洋側や沖縄・奄美を中心に広い範囲で曇りや雨の日が多くなりました。12 日には台風第 19 号が伊豆半島に上陸し、関東甲信地方と東北地方を通過したため、11 日から 13 日にかけて東日本から東北地方を中心に広い範囲で大雨、暴風、高波、高潮となりました。箱根(神奈川県)では 12 日の日降水量が歴代の全国で 1 位となる 922.5 ミリを観測するなど、多くの地点で記録的な大雨となり、13 都県で大雨特別警報が発表されました。その後も、18 日から 19 日にかけて南から湿った空気が流れ込んで前線の活動が活発となり、東日本と西日本の太平洋側を中心に大雨となった所がありました。各地域の気温は、期間のはじめと終わりは南から暖かい空気が流れ込んだため平年を上回りましたが、期間の中頃は大陸から冷たい空気が流れ込んだため、北日本を中心に平年を下回る時期もありました。

下旬は、高気圧と低気圧が交互に通過し、天気は数日の周期で変化しましたが、台風や低気圧が本州南岸から日本の東をたびたび通過したため、北日本と西日本の太平洋側や東日本では曇りや雨の日が多くなりました。また、南から暖かく湿った空気が流れ込みやすく、太平洋側を中心に大雨となる日もありました。21 日から 22 日には、台風第 20 号や台風から変わった温帯低気圧と活発な前線の影響で東日本太平洋側を中心に、大雨となった所がありました。また、24 日から 26 日にかけては、西日本、東日本、北日本の太平洋沿岸を進んだ低気圧に南から湿った空気が流れ込み、台風第 21 号周辺の湿った空気の影響も受けて、大気の状態が非常に不安定となりました。このため、北日本、東日本、西日本の太平洋側の広い範囲で大雨となりました。一方、北日本日本海側と沖縄・奄美では高気圧に覆われやすく、晴れた日が多くなりました。気温は、北日本を中心に暖かい空気に覆われやすく、南からも暖かく湿った空気が流れ込んだため、北日本、東日本、西日本ではかなり高くなりました。

【10 月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7 日目平均)は、例年値^(注)よりも 1 ポイント低い 72%でした。地方別の適中率では、北海道、九州南部、沖縄の各地方で例年値を上回りました。

最高気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値よりも 0.1℃小さい 2.0℃で、北海道、東北、北陸、四国、九州北部、九州南部、沖縄の各地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値と同じ 2.0℃で、関東甲信、九州北部、九州南部、沖縄の各地方で例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12 月の週間天気予報の利用にあたって】

12 月は、本格的な雪の季節の始まりとなります。北日本では雨よりも雪となる日が次第に多くなり、天気予報では降水が雪となるか雨となるかが重要なポイントとなります。天気予報では、「雪」や「雨」という予報だけではなく、雪になる地域や時間帯の割合が大きいときは「雪か雨」、また、雨になる割合が大きいときは「雨か雪」と発表しています。これにより雪の可能性がわかりますので、雪への早期の備えに週間天気予報をご活用ください。